

おひさま通信

相談支援
センターの
役割

相談支援専門員の役割は、障害があってもその人らしい暮らしが地域で実現できるようにしていくことです。Kさんは、自宅である一軒家で一人暮らしをしています。マイペー

Kさんの暮らし

出会いは、10年以上前になります。父親の入院をきっかけに病院の相談員より連絡がありました。当時のKさんは自宅で3年ほど引きこもりの生活を送っていました。父親は癌で、余命宣告を受けておりましたが、自身よりも息子の心配が大きく、病院から抜け出して自宅の様子を見に行くほどでした。実際に、支援者が自

宅訪問してもKさんからの応答がなく、警察立ち合いのもと中に入ると衰弱していて、すぐ入院ということもありました。

まずは、障害者手帳やサービス利用の申請と合わせて、父親を申立人としてKさん本人の成年後見を申請することになりました。闘病中の父親と家庭裁判所や法務局に付き添って、一緒に説明を聞き書類の記入を支援しました。その移動中、車の中で「(Kさんに)家を守ってもらいたい」「(Kさんを)よろしく頼む」と言われたことは心に残りました。

亡くなる直前には私の携帯に連絡を受け、急いで本人と一緒に病院に向かい、最期に立ち会うことができました。葬儀の準備は事前に済ませていたようで、本人が喪主を務め上げました。

今後の暮らしについて本人に想いを聞くと、「このままこの家で暮らしたい」「入院は嫌だ」「猫の世話をしてほしい」「できないところは助けてもらいたい」とのことでした。支援者として心配や不安、考えられるリスクはたくさんありましたが、支援を入れることで単身生活は成り立つのではと考え、自宅で一人での生活がスタートしました。

Kさんの暮らしを支えるチーム

Kさんの一人での暮らしは、福祉サービスはもちろん、多くの人の支援で成り立っています。家事については週6日「居宅介護(ヘルパー)」が自宅に訪問して、掃除、洗濯、調理と一緒に手伝ってくれます。他にも、「訪問看護」が週1回来てくれます。体調チェックだけでなく、入浴の促し、夏場のエアコン使用の促しなど健康的な生活を支援しています。また、訪問時には自宅の様子も見てくれていて、郵便物の確認、電化製品の故障、靴がブカブカなどなど、何かあれば「相談支援」まで連絡をくれます。日中は、病院内の「デイケア」に週3日、「就労継続支援B型」に週1日通っています。現在、自転車が壊れているので



徒歩での通所は大変だと思うのですが、このバランスがKさんにとって非常によさそうです。財産の管理は「後見人」がしています。手持ちのお金が少なくなると「相談支援」を通じて連絡を取り、自宅まで持ってきてもらいます。「相談支援」は連絡を受けて、市役所の手続きに同行、電化製品や靴などの買い物に同行など、日常以外の部分を支援しています。モニタリングを行い、サービス利用の確認も行っています。Kさんの単身生活を支えるという共通のミッションのもと集まったチーム。Kさんの飄々とした性格もあって、いいチームになっていると思います。

様々なことが起こる地域での暮らし

地域で暮らしていく中では様々なことが起きます。それはKさんも同じです。その都度、驚かされながら、バタバタしながら何とかしてききました。

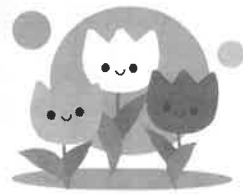
ご近所の方が怒鳴り込んでくるということがありました。その方の家族が介護サービスを利用しているということで、毎日のように支援者がくるKさんの状況がおかしい、不正をしているのではないかと思われたようでした。民生委員さんに間に入ってもらい、障害サービスのことをお伝え

して納得いただきました。

家の前のマンホールから水が噴き出し、道路が水浸しになってしまったことがありました。水道局に連絡をし、すぐに来てもらいました。幸いKさんが原因ではなく、すぐに水も止まりました。庭木が伸びて隣家に入ってしまうことがありました。社協の住民参加型サービスの「ちよこつと困りごとサポート」を活用して、地域の協力員に切ってもらいました。訪問営業にきた新聞の契約をしてしまうことがありました。洗剤をくれるという文句に乗っかり、2年後の1カ月間の契約にサインしてしまいました。取り消しもできるかもと伝えたのですが、Kさんは「あれば読むからいい」とそのまま、2年後忘れたところに配達されました。飼っていた猫が亡くなるということとがありました。自宅に伺うとKさんは庭に穴を掘っていました。以前飼っていた猫も自宅の庭に埋めたそうです。法律上は問題ないようですが、なかなか深い穴は掘れそうになく、近所の方の手前もあり、一緒にどういいうお見送りの仕方があるか調



べることにしました。いくつかの中から、以外にも質素な方法を選び、お見送りしました。「猫の世話をしたい」というのがKさんの希望の一つ、とても可愛がっていました。これからのことを聞くと「もう悲しい想いはしたくないんでね」とそれ以来新たな猫を迎えようとはしませんでした。



毎年の恒例行事

毎年の9月の恒例行事となつてい

滞在時間は15分ほど。拍子抜けするほど淡々と毎回あつという間ですが、すぐ景色のいい墓地で、続く父親と息子の関係があり、何だかとてもいい時間だと思っています。大事にしたいです。

Kさんに相談支援専門員として関わり、Kさんの想いが実現する、Kさんらしい暮らしを一緒に作ってきたように思います。やはり、グループホームや入所施設の方が何かあったとき安心ですし、常に職員や仲間、誰かが側にいて集団に支えられた暮らしがあります。ただ、Kさんは自由で自分のペースが守られる暮らし、そして何より父親が残してくれた家での暮らしを望んでいました。「このままこの家で暮らしたい」。Kさんは一人暮らしですが、その暮らしは多くの人の支援、チームに支えられています。自分たちだけでなく、様々な職種、他法人他事業所とチームを組んで支えています。そういうカタチの暮らし方も地域にはあります。地域の相談支援専門員である私は、みぬまの中より外で動いています。みぬまやみぬまの仲間のためというよりも地域のために働いています。地域の中でそういう役割を担っています。みぬまの中から外へ出たことで「地域」や「暮らし」につい

ての視点は確実に広がった、変わったという実感を持っています。みぬまと「地域」の間でジレンマを感じることでもありますが、違った視点を持ち込むことが、みぬままでの役割かもしれないと考えています。家族や周囲の人ではなく、自分はどうな暮らし方をしたいのかということ。仲間それぞれ様々な願いがあるはずで、その実現には、みぬまだけでは難しく、それこそ「地域」で考えていく必要もでてくるはずで、体験できる場や多岐に渡る選択肢、それをもとに本人の願いと一緒に形にしていく。ハードである暮らしの場づくりはもちろんですが、こういった暮らしの方のカタチ、ソフトも重要なのだと思います。

相談支援専門員の役割はそこにある。

支援センターみぬま職員 梅田 耕

